

昔むかし、宮廷の大臣たちの中に、ひとりのかしこい大臣がいました。王さまは、この人を信頼していて、第一大臣に取り立てようと考えました。すると、ほかの大臣たちのひとりが、それをねたましく思っつて、王さまにいいました。

「なぜあの人にそのような栄誉をお与えになるのです」

「あれは、かしこい」と、王さまは答えました。すると、その大臣は、

「では、あの人に、三つの問いをお出しなさいませ。三つとも答えることができたなら、ほんとうにかしこいのです。第一大臣になさるといいでしょう。でも、答えられなかったら、かしこくない証拠しょうこですから、打ち首になさいませ」と、入れ知恵をしました。

そこで、王さまは、かしこい大臣を呼んでいいました。

「おまえを、第一大臣に取り立てようと思うが、そのまえに、わたしの三つの問いに答えよ。答えられなければ、打ち首にする」

「しようちいたしました。では、その問いとは何でしょう」

「神の前に何があったか。神の顔はどちらを向いているか。わたしより富める者はだれか」大臣はこまっつてしまいました。

「いつまでに答えねばなりませんか」

「三日のうちに」

大臣は、頭をかかえて引き下がりました。入れ知恵をした大臣は、小おどりして喜びました。

かしこい大臣には、娘がひとりありました。頭がよくて、父親思いの娘でした。娘は大臣が悲しそうな顔で家に帰つてきたのを見て、

「父上、何をそんなに悲しんでいるのですか」とたずねました。大臣は、ため息をついて、

「王さまが、三日のうちに三つの問いに答えよとおっしゃつたのだ。答えられないと、わたしは殺されるのだ」といいました。

「どんな問いですか」

「神の前に何があったか。神の顔はどちらを向いているか。王さまより富める者はだれか」娘は、

「たったそれだけですか。それで、そんなに悲しんでいるのですか。たいしたことではありません。カフェに行けば、お百姓がおおせいいるから、そのうちのひとりにきけば、答えてくれるでしょう」といいました。

「ああ、そうしよう」と、大臣は行って、さっそくカフェに出かけて行きました。

カフェでは、おおぜいのお客が、たばこをふかしながら、お茶を飲んでいました。大臣が入って行くと、ぼろぼろの服を着た大きな男が、近づいてきて、

「何を探していなさる」とききました。

「それがなあ。王さまから三つの問いを出されているのだ。娘がいうには、ここに来ればだれかが答えを教えてくださいと

大臣が、そう行って、三つの問いを並べると、男は、

「では、三日後に、わしがいっしょに行つて、王さまに答えてやろう」といいました。

三日後、大臣と男は、お城に出かけて行きました。男は、くるみを一袋と、ろうそくを一本とマッチ、そしてチョコレートを持っていきました。

王さまは、大臣に、

「よく来た。答えは出たかな」といいました。

「はい。ですが、わたくしではなく、ここにいるこの男が答えるでしょう」

「このみすばらしい男がか」

「はい」

「よろしい。では、第一の問いだ。神の前に何があつたか」

男は、王さまにくるみの袋を渡していいました。

「お答えしますが、その前に、この袋の中のくるみを机の上にあけて、数を数えてください」

王さまは、数えはじめました。

「ひとつ、ふたつ、三つ、・・・」

「もう一度」と、男はいいました。王さまは、はじめから、

「ひとつ、ふたつ、三つ、・・・」

「もう一度」

「ひとつ、ふたつ、三つ、・・・」

男は、

「王さま、あなたはいつも『ひとつ、ふたつ、三つ・・・』と数えなされる。どうか、『ひとつ』の前から始めていただきますようお願いします」といいました。

「それは無理だ」

「なぜ無理です？」

『ひとつ』の前には、何もないからだ」

そこで、男はいいました。

「神はひとつ、前には何もない。答えは出ました。神の前には無むがあります」

王さまは、

「なかなかの答えだ。では、第二の問いだ。神の顔はどちらを向いておられるか」といいました。男は、ろうそくに火をつけて、机の上に置きました。

「このろうそくは、どちらを照らしておりますか」

王さまは、ろうそくをあちらこちらと、しきりに向きを変えたのち、いいました。

「ろうそくには、どこといって方向はない。どちらも照らしておる」

男は、

「神もその通り。あたり一面を照らしておられます」といいました。

「よろしい。では、第三の問いだ。このわたしより富める者はだれか」

「わたしです」

「おまえだと？そんなはずはあるまい。わたしには、金かねがある、多くの宮殿がある。だがおまえには、何ひとつない。まともな服もなくくつさえ持っていないではないか」

すると、男は、

「王さま、ちよつとこの床に寝てください」といいました。王さまが床に寝ると、男は、チヨークを出して、床に王さまの体を線でかたどりしました。

「どうぞ、お立ちください」

王さまが立ち上がると、男は、

「わたしが何をしたか、ごらんになりましたか」とききました。

「うむ」

「では、今度は、わたしにも同じことをしてください」

男は、そういうと、王さまをかたどった線のとなりに、ごろりと横になりました。大きな男

でした。王さまは、その周りにチョークで線を描きました。

男は、立ち上がっていいました。

「ごらんください。わたしのほうが富んでいます」

「どうして？」

男は、

「この世にほんとうの富はない。あなたは死ねば、一枚の金、一つぶの銀も、あの世へ持つていくことはできません。あなたの埋められる土地の広さだけが、あなたの富のすべてなのです。ところで、ごらんのおり、あなたの土地は、わたしのよりせまい。つまり、わたしは、あなたより富める者です」

王さまは、これを聞いて、大いに喜びました。そして、かしこい大臣に第一大臣の位をあたえました。ねたんで入れ知恵をした大臣は、打ち首にされました。

村上郁再話

資料『世界の民話18イスラエル』小川超訳／ぎょうせい